

石炭産業史と唐津（1/2）

～20世紀の唐津を支えた産業として～

石炭は、徳川時代末期から昭和中期までの100年余、燃料、エネルギー源として、日本経済を支えてきた。唐津、松浦川、厳木川の流域の地下は、その石炭の宝庫でした。石炭は“燃える石”として徳川時代の末期から家庭で使っていましたが、製塩用をはじめとした燃料となってから、需要が伸びてきた。

この新しい産業に眼をつけた唐津藩は、石炭採掘を保護する一方、上納金（税金）をとり藩の財源としてきた。幕末になって、洋式の軍艦が石炭を燃料とするようになり、炭坑の開発が急激に進む。

明治維新後、鉱山解放令、続いて「日本坑法」が制定され、すべての人が自由に採掘に参加できるようになり、一攫千金を夢みて小さな炭坑主が続々誕生する。

明治10年西南の役がおこり、石炭成金が生まれるが、その反動として一挙に不況に陥る。

石炭はより深く掘り進みますと、地下水・岩石の処理に、新しい技術、火薬の使用、捲揚機等の機械化のため莫大な資金が必要となり、近代的経営が必要となる。

明治になっての代表的な炭坑として、芳谷炭坑、相知炭坑がある。芳谷炭坑は、明治18年、北波多の芳谷に竹内綱、高取伊好ほか数名で、近代的技術を導入して発足、最盛期には従業員2,000名を誇る炭坑として成功する。明治42年には、その機械部門として設立されたのが、現在の唐津鐵工所である。

相知炭坑は現在の相知町の和田山（現相知総合グラウンド付近）に明治27年芳谷炭坑から独立した高取伊好が採掘するが、本格的に開発しようとするとき資金が枯渇し、涙をのんで、三菱鉱業に譲渡する。その後、相知炭坑は、日本有数の炭坑として、昭和のはじめまで操業する。（高取伊好はその後杵島炭坑に移り成功し今日の高取邸を残した。）

その後の唐津炭田は、三菱、貝島等の大手が進出し、日清、日露の戦争第1次世界大戦等を機に出炭量を増やす。一方、明治36年に現在のJR唐津線が開通し、唐津港の港は世界の唐津港として整備され、唐津地区の経済活動の根幹が整う。

大正時代の佐賀県内の出炭ピークは大正7年の2,210千トンでしたが、第1次大戦後の不況、昭和の恐慌と続き、昭和8年の満州事変から、軍需生産のための活況、その後、日中戦争第2次世界大戦を経て、昭和20年の敗戦と破局を迎える。

～2/2へつづく～

分野

産業

◎地図・写真・統計資料など



高取伊好関係 炭鉱位置図
(宮島醤油HPより)

◎引用・参考文献（出典）

- ◆ 『佐賀県石炭史』
(井手以誠著)
- ◆ 『石炭とともに』
(相知町鉱害者組合)
- ◆ 『相知町史』
- ◆ 『肥前国唐津領産物図考』

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html

石炭産業史と唐津（2/2）

～20世紀の唐津を支えた産業として～

分野

産業

◎地図・写真・統計資料など

～1/2からつづく～

石炭産業は戦時中の乱掘による壊滅状態から、戦後の日本経済復興を促すための、炭坑と鉄に対する食糧・資材・労働力を優先的に投入する傾斜生産方式をとり、漸く昭和23年頃には、戦前の水準に回復した。しかし政府の保護政策が撤廃されると、炭坑の宿命ともいえる、掘れば掘る程コスト高となり、石油との競争により、いわゆる「エネルギー革命」に抗しえず、昭和30年代後半から約10年間、閉山が相次ぎ、石炭時代はあっけなく消え去った。

因みに、佐賀県内の出炭量、労働者数をみますと

	大正7～9年	昭和35年
炭坑数	40～54坑	47坑
出炭量（年）	2,000～2,216千屯	3,064千屯
労働者数	22,277～29,383人	29,383人

以上唐津炭田の約100年の歴史をたどってみた。

石炭鉱業が唐津地区にもたらした経済効果は、測り知らぬものがある。危険過酷な労働に支えられ、公害問題等多くの問題があるものの、石炭産業がもたらしたものをどう評価するか、考えて頂ければ幸いである。

石炭産業にかかわる建物その他

1. 旧高取邸（芳谷炭坑、相知炭坑、杵島炭坑関係（高取伊好））
2. 唐津歴史資料館（三菱合資会社唐津支店本館）
3. 三菱鉱業、相知炭坑、豎坑跡
4. 九州電力、唐津火力発電所

◎引用・参考文献（出典）

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html